

教 仁 名 聞

第 92 号
(発行日)

2018 年 5 月 1 日

発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 6638113 西宮市
甲子園口 2 丁目 7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月 22 日 午後 2 時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月 2 日と 12 日 午後 3 時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月 6 日 午後 7 時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月 18 日 午後 6 時 30 分始。

* 8 月は 2 日の念仏座談会と 6 日の聖典学習会以外は休み。

孤独死に思う

近年は孤独死がしばしば話

題になります。人間関係が薄

くなり、親戚づきあいもなく、

地域での交わりも少なく、誰

にも知られずに、マンション

の一室で亡くなつて、数日た

つて発見されるといふ事例は

めずらしくなくなりました。

実際、老人の独り住まいは

多く、老齢になると病院通い

はしていても、急に体調を崩

して動けなくなり、そのまま

息絶える人はまれではありません。

ですから独り住まいのご老

人で「病気になるって体が弱り、

買い物にも病院にも行けなく

なつたらどうしよう。周りに

子供も親しい人もいない」と

いう不安を抱えている人が多

いと思います。ですからケア

ーマンションに入所したり、

ホームヘルパーを依頼したり

しますが、それでも皆が皆、

手厚い介護なりお世話なりを

受けれるわけではないでしょ

う。

こういふ不安は決して現代

だけではなく、昔からあつた

と思います。

私が二十歳ぐらいの時、大

谷派の佐々木蓮磨師がお説教

で、これに関するお話をされ

たことがあります。

師は大分県臼杵市の大谷派

寺院の住職をされていました

が、ご門徒のお参りをされる

なかで、ある時、老齢のご門

徒からこういう質問をされた

そうです。

「ご院さん、私は身寄りもな

く独りで生活してます。一人

ですから何時でも好きなとき

に起き好きなときに寝て、好

きな物を食べ、いつでも自由

に出かけられますから、独り

暮らしは気楽です。けれども

この先、身体が弱つて家で動

けなくなり、買い物にも医者

にも行けなくなつたらどうし

たらいいのか心配です」

と話されたそうです。昔のこ

とですから、老人施設もホー

ムヘルパーなどもほとんどな

い時代です。ですから、そう

いふ不安が起るのは当然です。

現代でも同じ問題はあります。

そう尋ねられて、佐々木師

は

「身体が弱り動けなくなつて、
出かけることもできず、また
周りに世話してくれる人もい
なかつたら、そのままじつと
しておればいい」

と。そうしたらその老婆は

「でも、そんなことではどう

にもならなくなります」

と。その時、師は

「そういう状態になつたらじ

つとしていたらい。そのま

まこの世を終わらせてもらえ

る。阿弥陀様が引き取つて下

さる。心配しなくていい」

と答えられたそうです。

このお話は仏教で言う「因

縁の道理に従う生き方」とし

て時々説かれますので、別段

突飛なお話ではありません。

普通人間は、自分の都合の

良いことには喜んで随います

が、都合の悪いことはこれを

拒否し容易に受け入れようと

はいたしません。

自分にとつて都合の悪いこ

とが降りかかってきますと、

それに対していろいろ対処を

しますが、どうしようもない

場合は、与えられた事実を受

け入れる、そのまま引き受け

る、そういう生き方を「因縁

に従う」生き方としてしばし

ば語られます。

江戸時代の高僧良寛禅師の

は

言葉で、禅師が「災難を逃れ
る法」として
「病む時は病むがよろしく候、
死ぬ時は死ぬがよろしく候」
と言われたのは有名です。

病気の時は病気になるってい

つたらよく、死ぬ時は死んで

いつたらいい、という、いわ

ば自分の都合の良し悪し、好

き嫌いを離れて、今の与えら

れている事実に従順して今、

今と生きる生き方であります。

これは仏教の道理として、

まことにその通りで文句の言

いようのない話です。

ただこの「因縁に従順して

生き、嘆くことも無く、不足

も無いという生き方」は、尊

いですが、達人にはできても

我執我愛の強い凡夫にはな

なかできないのも事実です。

たまたま検診を受けたら肺

ガンになつていて、かなり進

行しているなどと言われた時、

「病気の時は病気を引き受け

ていけば良い」と了解し、こ

の因縁に従つて、襲つてきた

出来事に対して、その事実を

その通りに受け入れて生きる

ということ、凡夫には容易

ではありません。そんな場合、

私たちはただ嘆いたり混乱し

たりでお先真つ暗になりかね

ません。

半世紀も昔のことですが、故藤原正遠師が、ご自分がお念仏に出会った時のことを話されました。それは、

「若い頃真宗を学ぶために大谷大学に入り、卒業してからのある日、喀血かっけつして口から血が出た時、はじめてお念仏が口を割って出て下さった。それが縁でそれ以後お念仏を申すようになった。そのお念仏によって広大な法の世界を知るようになった」

と仰せられていました。喀血したその時のことを歌に「いずれにも 行くべき道の 絶えたれば 口割り給う 南無阿弥陀仏」

と詠んでおられます。そして「極重悪人唯称仏」(正信偈)の思し召しを

「へどうにもならねば 我が名を称えよ」と阿弥陀仏は仰せ下さる。どうにもならぬまま、救い無きゆえアミダブツ、ナムアミダブツ」

とよく仰っておられました。またこれに関連し

「念々に 襲う苦悩の 棄て場所と なり給いては 南無阿弥陀仏」

という歌もあります。このようにしてサワリだらけの日々の生活において「ナ

ムアミダブツナ・ムアミダブツ」とお念仏と共に生きていかれた藤原正遠師でした。そしてやがて開かれてきた世界を

「あや雲の ながるるごとく わがいのち 永遠のいのちの 中をながるる」

と詠んでおられました。大いなるアミダのいのちに触れた歌なんですね。

どうにもこうにもならない場において「我が名を称えよ」という本願の仰せにであり、そのままナムアミダブツと称えつつ生きるという生活。その生活は遂に第十八願の「我が名を称えよ」の絶対の大悲心に逢着ほうちやくし、大悲の阿弥陀仏に摂め取られていくのでありましょう。

香樹院徳龍師の歌に「助くるぞ たのめの母の よび声の 今ぞきこえし 南無阿弥陀仏」

とあります。称えるお念仏がそのまま「助ける」という大悲心そのものであり、如来ご自身が摂取したもうことであつたと。

それまでお念仏は称えていながら気がつかなかった。しかし、ある時、称えるお念仏において、「助ける」と喚んで

下さっていた如来大悲であつたかと初めてのように知らされたという歌です。また香樹院師を慕われた禿頭誠師は

「朝夕に 口より出ずる 仏をば 知らで過ぎに ことのくやしき」

と歌っておられます。「どうにもならねば我が名を称えよ」で、困ったらナン

マンダブツ、苦しかったらナンマンダブツ、さみしかったらナンマンダブツと、念々の苦悩の中でナムアミダブツ・ナムアミダブツと称えながら生きる生活。

こうしたお念仏において、称えるナムアミダブツが「助ける」「引き受ける」「汝ともここに在る」との阿弥陀如来様ご自身であつたと知らされるのであります。

まことにお念仏は凡夫に与えられた、凡夫に応じて下さつた大慈大悲の救いの道であります。

(了)



仏慧功徳をほめしめて

(和讃問答)

十方の有縁うゑんにきかしめん

信心すでにえんひとは つねに仏恩報ずべし

(浄土和讃)

(現代語意識)

弥陀の大智大悲の功徳をほめたてまつって、十方世界の有縁の人々に聞かしめよう。すでに信心を得た人はつねに仏の功徳を人々に説いて仏恩に報ぜよ。

N 「仏慧功徳をほめしめて」

D 「阿弥陀仏のさとり智慧と、その智慧の善きはたらきたまう阿弥陀仏の大智大悲の善きおはたらきです」

N 「そのおはたらきはどこにどうはたらいているのですか」

D 「阿弥陀仏の光明と名号として万人に、今ここにはたらいておられます。それが私の上に現実化し具体化して下さっているのが、私の口に現れ

て下さるお念仏です。南無阿

弥陀仏の名号は具体化されている仏慧功徳そのものです」

N 「仏慧功徳をほめしめて」のほめしめて、とは」

D 「南無阿弥陀仏の功徳を讃えることです」

N 「どのように讃えるのですか」

D 「具体的にはお念仏を申すことです。お念仏を申していることが阿弥陀仏のお徳をほめていくことになっていくのです。南無阿弥陀仏を称えることは、私の側から言うところには、私の側から言うところには、阿

弥陀様、お助け下さって有り難うございます」と感謝して

いることになっていくのです。そしてそのままが南無阿弥陀

仏を世界に伝達していつていることになっていくのです」

N 「それだけです」

D 「南無阿弥陀仏のお説教をすることです。真宗のお説教は(ご)賛嘆」といわれますが、

南無阿弥陀仏のお徳を讃えることです。もちろんお寺でお説教するだけが賛嘆ではなく、

一対一で語り合うなかで南無

阿弥陀仏のお徳を讃えること

阿弥陀仏のお救いを語り合うことも賛嘆ですし、その救いを書物や便りに著わすことも仏徳賛嘆です。あるいは人にお説教を聞くことを勧めするのにも賛嘆になりましょう」

N「では真宗のお説教はみな仏徳の賛嘆なのでしょうか」

D「賛嘆にならない場合もありえます」

N「なぜですか」

D「南無阿弥陀仏のお心を間違つて説教する場合には、返つて人を惑わすことになりかねませんから」

N「ですけどお説教を聞く側の人は、そこを判断するのは難しいですね」

D「そうですね。そういう場合、お説教を聞く人はお念仏を称えながら聴けば良いのではないのでしょうか。そうするとお念仏のお助けに合うお説教は我が身に入つてきますが、合わない話は入り難いでしょう。そして次第に称えるお念仏に合ったお話を求めて聞くようになるのではないのでしょうか」

N「十方の有縁にきかしめん」とは」

D「全世界の中で、ご縁のある方々に仏慧功德なる南無阿

弥陀仏をお勧めし、南無阿弥陀仏の功德を説いて、聞いていただくこととすることです」

N「次に「信心すでにえんひとは」とは」

D「南無阿弥陀仏のお助けを聞いて、この南無阿弥陀仏様が、〈どうしてみようもない私をこのままで引き受けて下さる、ああ有難い〉と身にしみて受け取った人、いわゆる本願を信じた人のことです」

N「〈つねに仏恩報ずべし〉とは」

D「南無阿弥陀仏を、ああ有難いと感じる人は、阿弥陀仏のご恩を感じ、おのずと阿弥陀仏のご恩に報謝したい、応えたいという思いが湧いてきます」

N「では阿弥陀仏のご恩を報じる行いとはどういう行いですか」

D「仏への報恩は先ほど申しましたようにお念仏をよく称えることです。そして「**仏慧功德をほめしめて十方の有縁にきかしめ**」ようとして働くことだといえましょう」

N「そうするとこのご和讃は、弥陀の本願を聞いて信じた人は阿弥陀仏のご恩に報えてお念仏を称えつつ、有縁の人々に南無阿弥陀仏の大慈大悲を

説いて聞いていただくようではないか、とのご趣旨だといえますね」

D「ええそうです」

N「ところで仏恩報謝ということですが、南無阿弥陀仏を称え、お救いを説くことだけが仏恩にお応えする行為ですか」

D「それだけに限定はされないでしょう。聖人は「**仏法ひろまれ**」と言われているとにも「世の中安穩なれ」と願つておられます。世の中の平和、人々の安寧のために働くことも仏恩報謝に叶いましょう」

N「**仏法（真宗）**を広めることと世の中の安定とは関係があるのですか、あるとすればどういう関係ですか」

D「**仏法は真理を説いていきます**。何が人としてあるべきすがたであり、何があるべからざるすがたであるか、何が人生の抛り処とすべき真理であり、何が真理ではないか、人生に於ける正しい物の見方と正しくない見方、それらを教え示して下さるのが**仏法**です。もし正しくない物の見方（邪見）が横行すると世の中は乱れ、混乱し、人々は苦しみの中に落ち込んでいきましよう」

N「**仏法**で何があるべき状態だと言われるか、具体例を示して下さい」

D「**釈尊のご説法に依ります**とたとえれば、人はみな平等であつて、「生まれ」とか家柄によつて貴賤があるということを否定しています。また人間や社会の問題を暴力でもつて解決することは否定されています。それを不傷害戒（アヒンサー）といいます。また人間の生活は少欲知足があるべき生活であつて、自分の貪欲を充たすために生活してはならないと説かれています。もし働いて利益が必要以上に増えるなら、それを困窮（こんきゆう）している人たちに分かちあいなさい（布施）と勧められています。そして自己中心的な考えや行いは悪であるなどと教えて下さいます」

N「お釈迦様はさまざまに教えて下さつて居るのでね」

D「このような教えを聞くことによって、私たちの生き様がどうなっているのか、そこに自己批判が行われ、あるべき生き方へと向かうことが望ましいと知らされるのです」

N「もしこうした教えがなければどうなるのでしょうか」

D「**悪しき生活や行動にたい**

して批判がなされず、悪が悪として自覚されず、悪に歯止めがきかなくなり、善はすぐに出来なくても、まず悪を悪と知り善を善と知ることによつて、望ましいあり方が知らされ、また自らの悪が批判され、懺悔（ざんげ）され、悪の暴走を防ぐことができるのでしよう」

N「話は少し変わりますが、日本の戦前において仏教の指導者たちで戦争遂行に協力した人たちがいましたが、これはどうなんでしょうか」

D「ええ、**仏教徒**であり、**仏教の教え**を聞きながらも私たちは過ちを起こしかねないのですね。ですから**仏教を学び、それを身につけるのは容易でない**と思います」

N「たとえ**仏教の教え**を聞きつけている人でも過ちはあるのですね」

D「ええ、**煩惱具足の凡夫**であるということは誤りや間違いを起こしやすいや間違ったでもあります」

N「そうですね」

D「ですから**凡夫は**教えを聞き続けることを怠ることは出来ません。聖人ご自身も「**親鸞も偏頗あるもの**」といわれ、ご自分も偏つた見方をしてし

お便り

T・S氏からの便り

(T・Sさんの所感『木村無相師臨終法話注記』からの四月号よりの続きです。)

*

法信⑩より

N 「迷いの凡夫はたとえ仏教を信じたとしても、誤りやすいのですね。こわいですね」
D 「ことに社会で指導的な立場にいる人たちの責任は大きいですね。国の舵取りや方向を間違えると国民を塗炭の苦しみに投げ入れることになり、またそういう人たちが指導的な立場に置いているのは私たち一般の国民ですから、私たち一人一人の問題にもなっています」
N 「人の人生の抛り処、そして死して何処に行のくかという人生の根本問題や、何が真理であり何が真理に反することかなどを学ぶことが仏法を聞くことなのですね」
D 「ええですから正しい仏法を受け取り、それを讃歎し、人のあるべきすがたを説き示すことは仏のご恩に報い、それが世の中の安定に寄与していくことになりましょう」
(了)

本当はできないと真実に知ることが宿業の自覚というものです。自己の宿業が徹底して無能な機であると知らされる

ことが宿業の自覚、悲しみというものなのです。人間の頭で考えてわかるものは自覚でも悲しみでもありません。念仏に照らされて初めて弥陀の深い願心に涙するとき、深く自己を懺悔するとき必ずから絶対無能の自己を知らしめられるのです。「ナントモナイ機」の悲しみこそが弥陀の本願相應の正客であったのかと。弥陀の回向の願心は南無阿弥陀仏様です。

「我に信心あるうがなかるうが、みなそらごととたわごと、我が機は死ぬまで迷うゆえ、弥陀は我が機の親となり、弥陀の願心我が安心、ただ南無阿弥陀仏と仰ぐばかり」

法信⑩続き

アカヌ機(ナントモナイ機)をアカヌ機と知らされたのも法から知らされたのじゃ。だから、「アカヌ機一つ」(ナントモナイ一つ)が思い知らされたら、その場へオヤ(如来)を出さずとも、アカヌ機ぞよと知らされた一つの中にアカヌ機もマカセル法も一つに二

つが満足している。

そうであってこそ「本願相應のお念仏」であり、われわれ凡愚としてはこれよりほかに歩みようがないのです。そういう生き方を「ただ念仏」という。

☆私思う。「本願相應のお念仏」が絶対無能の私だと信知して下されれば、その中に弥陀の願心南無阿弥陀仏があるので、すから、そのうえに親の恩を持ち出さなくてもよいと。助からないままに助けられている不思議なる生き方を「ただ念仏」というのです。ここに初めて私のための念仏といただかれるのであります。本願相應のわが機のための本願相應の念仏なのです。絶対無能の宿業の自覚なぞ決してできないと自覚されたところが本願念仏のいただきどころなのです。絶対無能の私といただけたところが弥陀の願心の届きどころなのです。「本願相應の機と本願相應の念仏」ただこれだけでよいのです。ここまでわからして下さるお方が、無相菩薩さまとしか言いようがありません。ナムアミダブツ

【法味寸言】

佐々木蓮磨

一、念仏は自己が如来に取られていく行為である。

一、助かるとは、如来が私の主となってくださること。

一、まことは言葉以前にはない。

一、真宗では家を出てする修行はないが、家の仕事のみな修行。

一、今為していることを為すだけ。今思っていることを思うだけでよし。

* * *

〈遠方法話予定〉

- 五月九日。名古屋市。高畑開法会館。十時より十二時半。法話・座談。
 - 六月十三日(午後)から十五日(午後)。福井別院(宿泊可)。法話・座談。
 - 七月二十七日。名古屋市。高畑開法会館。十時より十二時半。法話・座談。
 - 七月三十一日。福井別院。二組の暁天講座(午前六時)。午前十時より座談。
- *詳しくは念佛寺にお尋ね下さい。

